

『空想から科学へ』（4）

この部分（第三章後半、段落二二〇～二二七）は、未来社会（社会主義・共産主義の社会）への移行過程とその社会の特徴づけ、この発展段階の人類史的な意義などの解説にあてられています。

講義は、前半でまず、エンゲルスの叙述にそって解説します。続いて後半で、その中のいくつかの主要な問題について、マルクス、エンゲルスの他の文献をテキストに、より立ち入った説明を行ないたいと思います。ここで読む文献は、この資料の2ページ以後に掲載してありますが、これは講義のテキストとしてで、予習は前提にしません。

第三章後半（未来社会論）

22. 資本主義社会の経済的衝突の解決は、社会が社会的な生産力を公然と掌握すること以外にない。生産手段の社会化。（84）
  23. 生産手段の社会化によって、人間社会にどんな変化が起るか。（84～86）
  24. どうやって社会化を実現するか。プロレタリアートが国家権力を掌握して、生産手段を国有化することがその第一歩になる。国家は階級の消滅とともに、やがて死滅してゆく。（86～88）
  25. 生産手段の社会化と階級の廃止が実現される基礎には、それを可能にする経済的諸条件を獲得した人類社会の発展段階がある。過去の階級社会の持つ歴史的意義も考察。（88～89）
  26. 新しい社会への変革の必然性（経済的条件の成熟が大前提だが、労働者階級と人民の側の主体的条件の発展を通じてこそ実現する）。新しい社会ではじめて、労働者階級は、生活の物質的保障とともに、「肉体的、精神的素質の完全で自由な育成と活動を保障する」生活条件を自分のものにする。（89～91）
  27. 人間社会の飛躍的発展の展望。社会的、自然的な諸条件をふくめ、「いままで人間を支配してきた、人間をとりまく生活条件の全範囲が、いまや人間の支配と統御のもとにはいる」。
- 必然の国から自由の国への飛躍。（91～92）

## 「資料」 未来社会論——マルクス、エンゲルスのその他の文献から

以下の文章は古典選書および新日本新書版『資本論』からとつていますが、訳文を変更した箇所が若干あります。

### A. 生産手段の社会化について

☆マルクス、エンゲルス『共産党宣言』（一八四八年）

「文献解説」『共産党宣言』は、マルクス、エンゲルスが最初に執筆した綱領的な文書で、そこでは、未来社会が次のように特徴づけられています。

「共産主義者の当面の目的は、すべての他のプロレタリア的諸党の目的と同一である。すなわち、プロレタリアートの階級への形成、ブルジョアジー支配の転覆、プロレタリアートによる政治的権力の獲得である」（古典選書『共産党宣言・共産主義の諸原理』七二ページ）。

「われわれがすでにさきに見たように、労働者革命における第一歩は、プロレタリアートを支配階級に高めること、民主主義をたたかいることである。

プロレタリアートは、ブルジョアジーからすべての資本をつぎつぎに奪い取り、すべての生産用具を国家の手に、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアートの手に集中して、大量の生産諸力をできるだけ急速に増大させるために、自分の政治的支配を利用するであろう」（同前八四ページ）。

「発展の過程で、階級の差異が消滅して、すべての生産が連合した諸個人の手に集積されると、公的権力（ゲヴァルト）は政治的性格を失う。本来の意味での政治的権力（ゲヴァルト）は、一つの階級が他の階級を抑圧するための組織された強力（ゲヴァルト）である。プロレタリアートが、ブルジョアジーにたいする闘争において、必然的にみずからを階級に結合し、革命によってみずからを支配階級とし、そして支配階級として強力的に（ゲヴァルトザーム）古い生産諸関係を廃止するときには、プロレタリアートは、この生産諸関係とともに、階級対立の、諸階級そのものの存在諸条件を、したがってまた階級としてのそれ自身の支配を廃止する。

階級および階級対立をもつ古いブルジョア的社会の代わりに、各人の自由な発展が、万人の自由な発展のための条件である連合体（アソツィアツィオン）が現われる」（同前八六ページ）。

☆マルクス「土地の国有化について」（一八七二年）

「文献解説」これは、インタナショナルの活動のなかでマルクスが書いた文章の一つで、イギリスの会員たちのなかに、土地を農業労働者の協同組合に

引き渡すことを社会主義の目標にしようとする意見があったのに対して、マルクスが、その誤りを指摘し、未来社会で土地や生産手段を所有する資格をもつのは、社会全体だということを説明したものです。ここでは、未来社会における「生産手段の社会化」の目標が、かなり具体的語られています。

「私は反対に次のように言う。土地は国民だけが所有できるという決定を、未来は下さであろう、と。協同組合に結合した農業労働者の手に土地を渡すということは、生産者のうちのただ一つの階級だけに全社会を引き渡すことにほかならないであろう。土地の国有化は、労資の關係に完全な変化をひきおこすであろうし、結局は、工業であろうと農業であろうと、資本主義的生産を完全に廃止するであろう。そうなったときにはじめて、階級差異と特権とは、それを生み出した経済的土台といっしょに消滅し、社会は一つの自由な『生産者』の結合社会（アソシエーション）に変わるであろう。他人の労働で暮らしていくようなことは、過去の事柄となるであろう！ そこには、社会そのものと区別された政府も国家も、もはや存在しないであろう！」

農業、鉱業、製造業、一言でいえばすべての生産部門は、しだいに最も効果的な形態に組織されていくであろう。生産手段の国民的集中は、合理的な共同計画に従って自覚的に活動する、自由で平等な生産者たちの諸結合体（アソシエーション）からなる一社会の自然的な基礎となるであろう。これこそ、一九世紀の偉大な経済的運動がめざしている目標である」（古典選書『インタナショナル』二二〇ページ）。

☆マルクス「フランス労働党綱領・前文」（一八八〇年）

「文献解説」一八七九年、フランスで、社会主義をめざす労働者政党がはじめて生まれました。マルクスはその一年後に、その党の指導部から、党綱領のなかの社会主義の目標の部分の執筆方を頼まれ、執筆したのがこの文章です。また、マルクスの理論はフランスではほとんど紹介されておらず、「社会主義」のスローガンはあっても、その内容はほとんど知られていない時代でした。マルクスは、そういう条件のもので、フランスの労働者たちに、「生産手段の社会化」という思想やそれをめざす闘争の基本点をどうやって広めるかに、工夫をこらしたのだと思います。そのとき、フランスの党幹部とともにその場に居合わせたエンゲルスは、「説得的な、数語で大衆に説明できる論証の傑作」だと絶賛の言葉を残しています。

「生産階級の解放は、性や人種の差別なしに、すべての人間の解放であること、生産者は生産手段を所有する場合にはじめて、自由でありうること、

生産手段が生産者に所属することのできる形態は、次の二つしかないこと、

一、個人的形態——この形態は普遍的な現象であったことは一度もなく、また工業の進

歩によってますます排除されつつある、

二、集团的形態——この形態の物質的および知的な諸要素は、資本主義社会そのものの発展によってつくりだれてゆく、

以上のことを考慮し、また、

このような集团的取得は、独立の政党に組織された生産階級——すなわちプロレタリアート——の革命的行動からのみ、もっぱら生まれうること、

このような組織の達成をめざして、普通選挙権をもふくめて、プロレタリアートの自由になるあらゆる手段で努力しなければならないこと、このことによって、普通選挙権は、これまでのような欺瞞の用具ではなくなって、解放の用具に転化すること、

以上のことを考慮して、

フランスの社会主義的労働者は、経済の部面ではすべての生産手段を集団に返還させることを目標として努力する一方、組織化および闘争の手段として、次の最小綱領をもつて選挙に参加することを決定した」（古典選書『多数者革命』一〇一ページ）。

## B. 過渡期の問題

☆マルクス『資本論』第一部（一八六七年）

「文献解説」第一の文章は、『資本論』に社会主義・共産主義の社会がはじめて出てくる文章です。第二の文章は、資本主義社会からその共同社会への転化は、資本主義社会の誕生の時よりも「比較にならないほど」短い時間で済むだろうという見通しを説明しています。

「最後に、目先を変えるために、共同的生産手段で労働し自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体を考えてみよう」（新書版①一三三ページ）

「諸個人の自己労働に基づく分散的な私的所有の資本主義的な私的所有への転化は、もちろん、事実上すでに社会的生産経営にもとづいている資本主義的所有の社会的所有への転化よりも、比較にならないほど長くかかる、苦しい、困難な過程である。まえの場合には少数の横奪者による人民大衆の収奪が行なわれたが、あとの場合には人民大衆による少数の横奪者の収奪が行なわれる」（同④一三〇六〜一三〇七ページ）。

☆マルクス「フランスにおける内乱」第一草稿（一八七一年）

「文献解説」マルクスは、『資本論』第一部を刊行した四年後、フランスの労働者階級のパリ・コミューンの闘争に直面して（一八七一年）、資本主義社会から共同社会への移行過程について、あらためて立ち入った研究をこころなしました。マルクスは、「フランスにおける内乱」の表題で発表した文章

(インタナショナルの声明文)では、その結論についてごく部分的にしか言及しませんでした。草稿のなかには詳細な叙述があります。以下はその草稿の関連部分です。

これは、一続きの文章ですが、説明の都合上、五つの部分に区切って番号をつけました。

(1)「労働者階級は、彼らが階級闘争のさまざまな局面を経過しなければならないことを知っている」。

(2)「労働の奴隷制の経済的諸条件を、自由な結合的労働の諸条件とおきかえることは、時間を要する漸進的な仕事でしかありえないこと(その経済的改造)、そのためには、分配の変更だけでなく、生産の新しい組織が必要であること、言い換えれば、現在の組織された労働という形での生産の社会的諸形態(現在の工業によってつくりだされた)を、奴隷制のかせから、その現在の階級的性格から救いだす(解放する)ことが必要であり、その調和のとれた国内のおよび国際的な調整(coordination)が必要であることを、彼らは知っている」。

(3)「この刷新の仕事が、既得権益と階級的利己心の諸抵抗によって再三再四押しとどめられ、阻止されるであろうことを、彼らは知っている」。

(4)「現在の『資本と土地所有の自然諸法則の自然発生的な作用』は、新しい諸条件が発展してくる長い過程を通じてのみ、『自由な結合的労働の社会経済の諸法則の自然発生的な作用』によっておきかわりうることを、それは、『奴隷制の経済諸法則の自然発生的な作用』や『農奴制の経済諸法則の自然発生的な作用』が交替した場合と同様であることを、彼らは知っている」。

(5)「しかし同時に彼らは、政治的組織のコミュニケーション形態を通じて巨大な進歩を一举に獲得できることを、そして、彼ら自身と人類のためにその運動を開始すべき時がきていることも、知っている」(全集⑩五一七〜五一八ページ)。

☆マルクス「ゴータ綱領批判」(一八七五年)

「文献解説」一八七五年、ドイツの二つの労働者党が合同したときに、思想的な妥協をして間違った路線をとりこんだ綱領をつくってしまった、という事件が起りました。マルクスは、現地の幹部への非公開の手紙で、そのことを厳しく批判しました。これが「ゴータ綱領批判」と呼ばれる文献です。その中で、マルクスは、資本主義社会から社会主義・共産主義の社会への移行が、短期間に完了するものではなく、歴史的な一時代をなす過程であることを初めて指摘しました。それが以下の文章です。

「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、一方から他方への革命的転化の時期があ

る。その時期にまた政治的な過渡期が対応するが、この過渡期の国家はプロレタリアートの革命的執権（ディクタトゥール）以外のなものでもありえない」（古典選書『ゴータ綱領批判・エルフルト綱領批判』四三ページ）。

### C. 未来社会における人間の発達

☆マルクス『資本論』第三部第七篇から

「文献解説」マルクス、エンゲルスは、若い時期から、未来社会の最大の特徴として、社会を構成するすべての人間が、自分の能力を自由に発達させる時間と条件を保障され、そのことが人間社会の飛躍的発展の推進力となることを力説・強調してきました。その点をもっとも深く解明したものが、『資本論』第三部第七篇の最初の章「三位一体の定式」の章の次の文章です。なお、ここでは、「自由の国」と「必然の国」という用語が、『空想から科学へ』におけるエンゲルスの使い方とはまったく違った使い方になっていることは、注意して読んでほしい点です。

この文章も、原文では、一続きの文章として書かれているものですが、理解しやすくするために、いくつかの部分に分け、不破の責任で見出しをつけました。

搾取社会における剰余労働。「剰余労働一般は、所与の欲求の限度を超える労働として、つねに実存し続けなければならない。「しかし」剰余労働は、資本主義制度においては、奴隷制などと同じように、ただ敵対的形態をとるほかになく、社会の一部分のまったくの無為によって補足される。一定分量の剰余労働は、不慮の出来事にたいする保険のために必要であり、諸欲求の発達と人口の増加とに照応する、再生産過程の必然的な累進的な拡張——この拡張は資本主義的立場からは蓄積と呼ばれるものである——のために必要である」（『資本論』⑬一四三三ページ）。

資本主義段階は社会のいっそう高度な段階を準備する。「資本がこの剰余労働を、奴隷制・農奴制などの以前の諸形態のもとでもよりも、生産諸力の発展にとって、社会的諸関係の発展にとって、またより高度の新たな社会形態「未来社会——不破」のための諸要素の創造にとつて、いっそう有利な様式と諸条件のもとで強制するということは、資本の文明化的側面の一つである。こうして資本は、一方では、社会の一部分による、他の部分を犠牲にしての、強制と社会的発展（その物質的および知的諸利益を含む）の独占化とが見られなくなる一段階「未来社会、社会主義・共産主義の段階——不破」を引き寄せる。他方では、この段階「資本主義段階——不破」は、社会のいっそう高度な一形態において、この剰余労働を物質的労働一般にあてられる時間のいっそう大きな制限と結びつけることを可能にする諸関係のための、物質的諸手段、およびその萌芽をつくりだす。というのは、

剰余労働は、労働の生産力の発展しだいで、総労働日が小さくても大でありうるし、総労働日が大きくても相対的に小でありうるからである。…：社会の現実的富と、社会の生産過程の恒常的な拡大の可能性とは、剰余労働の長さに依存するのではなく、剰余労働の生産性、および剰余労働が行なわれる生産諸条件の多産性の大小に依存する」(同前一四三三～一四三四ページ)。

未来社会。自由の国と必然の国。「自由の国は、事実、窮迫と外的な目的への適合性によって規定される労働が存在しなくなるところで、はじめて始まる。したがってそれは、当然に、本来の物質的生産の領域の彼岸にある。野蛮人が、自分の諸欲求を満たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならぬように、文明人もそうしなければならず、しかもすべての社会諸形態において、ありうべきすべての生産様式のもとで、彼「人」は、そうした格闘をしなければならない。彼の発達とともに、諸欲求が拡大するため、自然的必然性のこの国が拡大する。しかし同時に、この諸欲求を満たす生産諸力も拡大する。この領域における自由は、ただ、社会化された人間、結合した生産者たちが、自分たちと自然との物質代謝によって——盲目的な支配力としてのそれによって——支配されるのではなく、この自然との物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおくこと、すなわち、最小の力の支出で、みずからの人間性にもっともふさわしい、もっとも適合した諸条件のもとでこの物質代謝を行なうこと、この点にだけありうる。しかしそれでも、これはまだ依然として必然性の国である」(同前一四三四～一四三五ページ)。

真の自由の国。労働日の短縮が根本条件。「この国「必然の国、すなわち物質的生産——不破」の彼岸において、それ自体が目的であるとされる人間の力の発達が、真の自由の国が——といっても、それはただ、自己の基礎としての右の必然性の国の上のみ開花するのであるが——始まる。労働日の短縮が根本条件である」(同前一四三五ページ)。